

2001年 農薬ゼミ

News Letter

Vol.13

仲田さんを囲んで お話を聞く

私たち農薬ゼミと仲田さんは、もう長いお付き合いですが、なかなかじっくりとお話をお聞きする機会がありませんでした。そこで、今回、改めてじっくり、仲田さんの生い立ち、ミカンのことなどについて、仲田さんにお話を伺いました。（お話を、五月の花見の際にお聞きしました。）

※注 仲・・・仲田さん 石・・・石田先生

聞・・・聞き手（松田・和泉・砂本）

農薬に対する意識

聞：昔、省農薬ミカンを始めたときと、今と比べて、仲田さんの農薬に対する意識、世間の人意識といふのは、どういう風に変わってきたんでしょうか。

仲：そうやなあ、まあ、始めた当時はほんまに、「農薬使わん」と作物できるか「つていい、ほとんどはそういう農家の人は少なかった。それがだんだんと、消費者の方（かた）らも、あんまり農薬のか

かつてないものを食べたという声が伝わってきただして、農家も、まあ、販売していくちゅう点もあつとうなあ。農薬使わん



仲田芳樹さん

と農産物売れないと農業もあつたけど、それがだんだんと、やっぱり、農薬を使わない産物でも消費者が買ってくれるようになつたから、今は、農薬かけやんと、できるだけ使わんと作りたいちゅう人の方が多なつてきたんちやうかなあ、逆になつてきたんちやうかなと思う

聞：やはりすんで使つてゐるわけではないんですね。使い出したのは、なにい。

仲：やっぱり、きれいなものが望まれた。そういう

～もくじ～

- 1面 仲田さんを囲んでお話を聞く
- 5面 省農薬ミカン今年の農薬使用状況
- 7面 農薬ゼミ今年の主な活動
- 8面 ミカン山通い二十五年
- 9面 南紀白浜より～椰子の実～
- 10面 ヨルダンを知っていますか？
- 12面 宇根さん講演会要旨
- 14面 農薬ゼミ紹介
- 15面 農薬ゼミ新人レポート・編集後記
- 16面 みかんを長持ちさせるために

品物を作らないと、買つてくれやんし、また値段も高く売れないという、それがあると。さんがあながたから、例えは仲田さんはもう大分農薬を使つていませんか？

仲：マシン油乳剤ついてのがあつたよ。自分とこでねえ、石鹼とかこういう風にかけてねえ……。石鹼を薄く切つてねえ、釜で炊いてねえ。そういう、マシン油をふつたりして。昭和十八年、十九年中には、方ス薰蒸つてねえ。木へ紙袋かけて、そして、横と長さと計つて、そして、中の容積を出して、硫酸と苛性ソーダと。壺あつてね、そこへ水と硫酸と入れたやつを持つて、片方で、青酸を量つたのを新聞紙に包んで、持つて歩いて、息殺して、バツと開けてくんたよ、ブワッ！と。恐なかつたなあ、それでも、夏

の作業で、十五分、袋かけとく。それで十五分きたら、もう時間きたからといふて、今度は反対に返していくんよ……。でもねえ、まくり上げた時に、宙見てたらね、フワーッとやつぱりきた。

聞：先程、「農薬なしで作れるかい」とおっしゃつてましたけど、消費者が買つてくれるんだつたら、農薬がなくとも作れるノウハウはあるぞという自負はあつたんですか。

仲：それは、ああ。

聞：ただ、使わないと、日本で栽培した頃から、農薬を使つていたのでしようか。

仲：いやあ、やっぱり昭和初期やろ。覚えたときから、そうやな、小学校六年生時にヤノネカイガラムシ（図一）っていうのが出てきだしたなあ。それで使うようになつてきました。勘定間違つたら、ミカンの木の葉つぱ落ちてもうたよ。桃も落ちるしな。枯れはせなんだけなあ、回復にかなり、年数かかつたと。二、三年かかつと。

仲：勝手やと思つたことはないんやけど。けども、農薬を使わんといつても、農薬がいいだとか、意識がころつと変わりましたか。

聞：消費者は勝手だと思ったことは？昔はきれいやないと買わなかつたのに、今頃になつて、省農薬がいいだとか、意識がそらあ。

仲：いいと思うわなあ、そらあ。

聞：仲田さん自身は、農薬は昔から毒と御存じでしたか？

仲：やめろとはいわれへんけど、そんな「アホな応はいかがでしたか。

仲：いいと思うわなあ、そらあ。

聞：仲田さん世代の人たちからすると、ミカン園は誰かに継いでほしいですか？

仲：周囲の農家

聞：仲田さんが省農薬ミカンづくりを始めたとき、周りの農家の人たちの反応はいかがでしたか。

仲：やめろとはいわれへんけど、そんな「アホな応はいかがでしたか。

仲：いいと思うわなあ、そらあ。

聞：仲田さん世代の人たちからすると、ミカン園は誰かに継いでほしいですか？

仲：周囲の農家

聞：仲田さん自身は、農薬は昔から毒と御存じでしたか？

仲：やめろとはいわれへんけど、そんな「アホな応はいかがでしたか。

仲：いいと思うわなあ、そらあ。

聞：仲田さん世代の人たちからすると、ミカン園は誰かに継いでほしいですか？

仲：周囲の農家

聞：仲田さん自身は、農薬は昔から毒と御存じでしたか？

仲：やめろとはいわれへんけど、そんな「アホな応はいかがでしたか。

仲：いいと思うわなあ、そらあ。

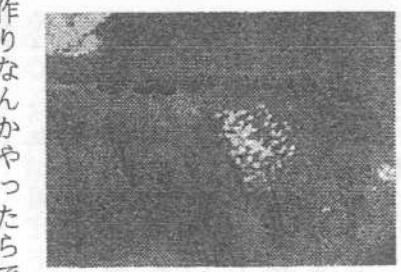
聞：仲田さん世代の人たちからすると、ミカン園は誰かに継いでほしいですか？

仲：周囲の農家

聞：仲田さん自身は、農薬は昔から毒と御存じでしたか？

仲：やめろとはいわれへんけど、そんな「アホな応はいかがでしたか。

仲：いいと思うわなあ、そらあ。



図一 ヤノネカイガラムシ

聞：昔から、例えは仲田さんがミカンづくりを始められた頃から、ミカン農家はもう大分農薬を使つていませんでしたか？

仲：マシン油乳剤ついてのがあつたよ。自分とこでねえ、石鹼とかこういう風にかけてねえ……。石鹼を薄く切つてねえ、釜で炊いてねえ。そういう、マシン油をふつたりして。昭和十八年、十九年中には、方ス薰蒸つてねえ。木へ紙袋かけて、そして、横と長さと計つて、そして、中の容積を出して、硫酸と苛性ソーダと。壺あつてね、そこへ水と硫酸と入れたやつを持つて、片方で、青酸を量つたのを新聞紙に包んで、持つて歩いて、息殺して、バツと開けてくんたよ、ブワッ！と。恐なかつたなあ、それでも、夏

の作業で、十五分、袋かけとく。それで十五分きたら、もう時間きたからといふて、今度は反対に返していくんよ……。でもねえ、まくり上げた時に、宙見てたらね、フワーッとやつぱりきた。

聞：先程、「農薬なしで作れるかい」とおっしゃつてましたけど、消費者が買つてくれるんだつたら、農薬がなくとも作れるノウハウはあるぞという自負はあつたんですか。

仲：それは、ああ。

聞：ただ、使わないと、日本で栽培した頃から、農薬を使つていたのでしようか。

仲：いやあ、やっぱり昭和初期やろ。覚えたときから、そうやな、小学校六年生時にヤノネカイガラムシ（図一）っていうのが出てきだしたなあ。それで使うようになつてきました。勘定間違つたら、ミカンの木の葉つぱ落ちてもうたよ。桃も落ちるしな。枯れはせなんだけなあ、回復にかなり、年数かかつたと。二、三年かかつと。

仲：勝手やと思つたことはないんやけど。けども、農薬を使わんといつても、農薬がいいだとか、意識がころつと変わりましたか。

聞：消費者は勝手だと思ったことは？昔はきれいやないと買わなかつたのに、今頃になつて、省農薬がいいだとか、意識がころつと変わりましたか。

仲：いいと思うわなあ、そらあ。

聞：仲田さん自身は、農薬は昔から毒と御存じでしたか？

仲：やめろとはいわれへんけど、そんな「アホな応はいかがでしたか。

仲：いいと思うわなあ、そらあ。

聞：仲田さん自身は、農薬は昔から毒と御存じでしたか？

仲：やめろとはいわれへんけど、そんな「アホな応はいかがでしたか。

仲：いいと思うわなあ、そらあ。

ではやつてたん?
仲：二十五年までもやら
なんだなあ。まあ、三十二
年くらい今までやつたなあ。
ガス薰蒸ちゅうて。
聞：最初、農薬を農協か
ら勧められたときというの
は、危険意識はあつたんで
すか。使つたときに、変な
気分になるなあ、とか。
仲：そらあ、あつたあつ
た。ニッソール（※農薬名。
この薬で、仲田さんの甥、
悟さんが中毒死し、裁判が
行われた）使うたやろ。ホ
リドールよう。
聞：農協からは説明あつ
たんですか。体にはどう
だ、あんまり吸わないよう
にとか。
仲：危険性はあるつちゅ
うだけのことちやう。その
くらいの話しかきかんちや
う。危険やでちゅうな。
聞：どつちの方が、強
かつたですか。ああ、こん
な便利なものがあるのかつ

仲：危ないのは、やつた
らよう効くとなあ。
聞：便利だなあつていう
気持ちはありましたか？
仲：便利とは思えんけど、
よう効く薬やなとは思つた
なあ。
聞：大窪じゅうでみんな
わあつと使わはつたんです
よね。
仲：使うた使うた。
石：誰が一番最初に、そ
ういうとこへばつと農薬
使つたん？村の中で誰か
が、いるやん、新しもん好
きとか。一齊にそうなつた
の？それとも誰かが？
仲：一齊になつたよ。
石：誰かがわーつとやつ
てて。
仲：聞こえてくるな。
やつぱりずうつと。ホリ
ドールは水田にやんねけ
ど、あれあの、ミカンにかけたら、きれいになつてくる
でつて、聞こえてくると
な、わーつと使い出したな

石：ミカン園もホリドール結構使うたん？
仲：使うた。使うたらさあきれいになつた。
聞：ホリドールって何ですか？
石：パラチオン。害虫はもう、ほとんどいんようになつた？
仲：そうだなあ。
聞：年に七、八回やつてたのは、農協の指導が。
仲：農協の指導つてもういらんいらん。もう、そんなんもう。自分が編み出した、防除歴よ。もう、剪定した後はねえ、やつぱりノコギリ使うて木切つてるやろ、その傷癒すために、殺菌剤やるために、ボルドー液やつたでしょ。ほんで、もう、夏やつたら、殺虫剣だなあ。
聞：農協から防除歴が出たら、もっと回数が増えたんですね。
仲：そらあ、そうだよ。

省農業ミカン 今年の農業使用状況

省農業みかんは、仲田さ

省農薬みかんは、仲田さんが、みかんと対話しながら、本当に必要なときだけ、必要量の少量の農薬を使用して、育てられたみかんです。今年も仲田さんとみかん、大自然の中で、農薬散布は二回に抑えました。使用した農薬と時期をお知らせします。

6月 ジマンダイセン
(殺菌剤)
7月 夏季マシン油
(殺虫剤)

2001年12月8日 京大農薬ゼミニュースレター

聞：木の手入れとかはあ
んまり変わらないと思う
んですけど、肥料と、農薬
は。

仲：十代の頃は、商人か
ら買つた。農協では扱つ
てなかつた。

聞：それは、化学肥料で
すか？

仲：化学肥料は、なかつ
たから。

聞：ないですよねえ。だ
から、そのいわゆる、堆肥
ですか？

仲：魚よ。魚粉。

石：魚粉って、粉になつ
たの？魚そのものやつた
んぢやう？

仲：そうそう。

聞：魚そのものを播いて
たんですか。

石：いや、ぢやうちぢやう

聞：水田はそんなことしてたんですか？

仲：ニシンをなあ。

石：ニシン！

聞：ニシンが山ほどそれたから。

石：ミカン園はしなかつたの？

仲：ミカン園はそれなかつた。ミカン園は粉末にしてあつとう。

聞：そのころ、薬が出始めたんですか？

仲：薬は、そんなもんない。

聞：ないですか。虫とか。

仲：虫？あつたあつた。

聞：ヤノネはまだ、入つてくる前ですか？

仲：もうでも、ヤノネもあつたよ。

聞：そのころに、一番重

石：ほいでそのころ一日にどのくらい農作業やつとつた？

仲：六、七時間やなあ。

石：その頃、昭和四十年の頃は、大窪（※仲田さんの住む集落）の人は、下へ働きに行くちゅうことは、なかつた？

仲：まだなかつたな。

石：まだミカンで十分やつていけてた時代か。

聞：一九六五年ころですか？今で言う防除歴（その年に使用するとよい農薬、時期を示したもの）ついていふのができたのは。

仲：個人商人さんが激しいから、そこで、ウチからつて。使え使えちゅうてな。

聞：そんなんが激しくなつてきたのは何年ぐら

仲：撒くことは撒いたけどねえ。「こんな虫湧いたけど」と言うて農協へ聞き行つてやなあ、ほいで農協で、こんな薬使え言うて。

聞：年に、その当時でどのくらい撒いたなんですか？

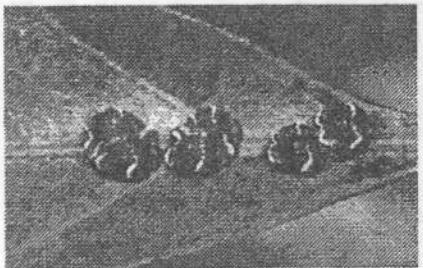
仲：そうやなあ、やっぱり殺菌剤と、それからヤノネの九月、それから秋の、秋口、とる前に。春もそうやけどなあ。剪定おわつて。

聞：やつぱり七、八回は。

仲：春は剪定やろ。まず、そこで・・それから六月のボルドー液やろ、それで七月のロウムシ、八月は暑いさけ、九月に入つてまたヤノネの。まあ、七、八回。八回くらいやつちやるなあ。

・かつてのミカン作り
聞：仲田さんが子供の頃
のミカン作りつていった

ちやう。
仲：粉末にはしてある。
石：粉末にはしてある。イワ



図二 ルビロウムシ

ジユース。

ジュース。

いなんですか。

農業ゼミ今年の主な活動

本間 淳

今年度の農業ゼミは、『地球にやさしいを問う』をスローガンに、複数のプロジェクトを立ち上げることにしました。この「地球にやさしい」という言葉は、環境問題を考える上ですっかり定着し、使い古された感すらあります。しかし果たして「地球にやさしい」とはどういうことを指すのでしょうか。何の（誰の）ために「やさしく」しなければならないのでしょうか。こういったことがはっきりと位置づけられないままに進んできてしまっている環境思想に対して、あらためて根本から問い合わせることが必要と考えます。

たとえば、省農薬・減農薬運動を含む有機農業は、今年度から認証制度がスタートするなど、今では社会的にすっかり認められたとされます。これに対し、有機農業運動の歴史を簡潔にまとめたテキストとして「『夏子の酒』の読み直し」を行いました。これにより、運動の初期の展開と現在の状況とを対比することを目指します。他にも、

- ・「有機農産物認証制度のその後」
 - ・「『過程』を知る」
 - ・「環境教育を問い合わせ直す」

等のプロジェクトを企画しています。

また、10月には福岡において減農薬運動に長年たずさわってこられた宇根豊さんをお招きし、『経済の国の赤トンボー百姓が考える新しい農学ー』と題する講演会をおこないました。狂牛病問題にみられるように、日本農業は安全神話すら崩れ去りました。その中で、日本の（地元の）農作物を食べるということにどういう意義を見いだしていったらよいのか、またそれを支える農学とはどうあるべきかについて語つていただきました。この講演会の内容については別項に要旨を掲載しましたので、ご参照下さい。

4～5月 ゼミ活動のプロジェクト化について
5月25～27日 省農業みかん園花見

6～7月 『夏子の酒』輪読
 7月 21～23日 省農薬みかん園夏調査
 10月 13日 宇根豊氏講演会
 11月 2～4日 省農薬みかん園秋調査
 11月 23～25日 省農薬みかん収穫

(ほんまあつし・農学研究科昆虫生態修士一年)

京大農薬ゼミニュースレター

第13号

[6]

仲：そうそう、方法ばつかりやつた。減反政策出てから十年になるでな。
聞：いよいよあかんて言つて減反しようとするのが、十年前。

万円。聞：去年から？仲：今年から。こないだ、ようよう金入つとる。三ヶ月四十万円入ったんぢやう。金が。

仲：もうあのー、加工用のミカンやな。
聞：そのころから、働きに出はる人とかも出始めたんですね？
仲：もう、働きに行く人

んやろけどなあ。それが、
こがいなことしてたらあ
かんて、気いついたんやろ
なあ。やっぱり、ミカン一
生懸命作らなかんとい
うて、出稼ぎが、止まつて

ちゅうことやなあ。
聞：減反政策の話ですが、減反した人がミカン植えてよくなつた後、市場はよくなつてきましたか？
仲：よくなつてでないけ

仲：そうそう、方法ばかりやつた。減反政策出でから十年になるでな。
聞：いよいよあかんて言つて減反しようとするのが、十年前。
仲：最初はもう減反政策で、いらぬ木切つてもうたどこへ、去年からねえ。もう、またミカンしようと何しようと構へんねん。八年間あかん。止められた。ミカンはあかんけどミカン以外のもの。
聞：ミカンの減反つていふのは、一律なんぼ減らすとか。
仲：そんなことはない。
仲：そんな割り当てではない。だから、もうねえ。反当たり三十万円くれたんや。申し込んだらええねん。もう今切つたつて、一錢もくれやんけど。その代わり、今年から、現在作つてる反別にねえ。荒らさんとくためにつていうてねえ。一万円。荒らさん。ミカン作らいいでも、荒さなかつたら一

聞：去年から？
仲：今年から。こないだ、
ようよう金入つとる。三、四十万円入つたんちやう。
金が。
聞：四十二年に暴落した
後、ミカン作りは変わりま
したか？
仲：変わつた変わつた。
そらやつぱり、減反するく
らい、みんな、墮農になつ
てきとる。
聞：やつぱりミカンがん
ばつて作つても儲からな
いから？
仲：そうよ。
聞：出稼ぎとか、勤めに
出たりとか・・・。
仲：それかつてなあ、え
えミカン作らな。まあ、え
えとこ、ええミカンの作つ
てるとこは自分で作るけ
ども。それ以外のところ
は、割合、墮農やな、ほつ
たらかしになつてるんや
な。
聞：薬だけまいて、そこ
そこきれいなミカンを？

仲：もうあのー、加工用のミカンやな。
聞：そのころから、働きに出はる人とかも出始めたんですね？
仲：もう、働きに行く人が減ってきたよ。
聞：四十二年くらいに暴落した後くらいから、ミカンだけじゃ食つていけないっていう人が出稼ぎを。
仲：ほいで、減反政策に入つてから、今度はもう、やめとるな。出稼ぎはやめてもうたな。
聞：専業の人が増えたということですか？
仲：専業にな。
聞：四十二年の後、十年くらい、ミカン農家はどういう感じだったんですか？
仲：なあ。やっぱり景気のええ時代の金の使い方してきちゃったんで、その後で、自分とこの経済どないかしてこうと思って、出稼ぎに、換金の方へ行つた



今年、たわわに実った
みかんです！

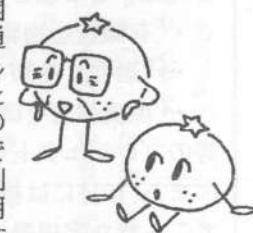
ちゅうことやなあ。
聞：減反政策の話ですが、減反した人がミカン植えてよくなつた後、市場はよくなつてきましたか？
仲：よくなつてでないけどな、品種更新したして。
あの、高糖系ちゅうの。
聞：その、甘いミカンが始めたのも、ここ十年くらいなんですか？
仲：まだ十年もたたん。
聞：品種は徐々に変わつてきてるんですか？
仲：やっぱ変わつてきてるよ。高糖系、やっぱり糖度の高い品種。
聞：変える時つてのは、接木ですか？
仲：高接ぎ更新と、それから、ばさっと切つてもうて、新しい品種にする。品種によつてまだねえ、苗本のないものもある。だから高接ぎせな。それかつてなあ、高いわあ。一本三千円ほどするんとちやう。
聞：品種を変えようと思つたら、大変な労力です

仲：やめようとは思へ
んけどねえ。やめようとは
思へんけど。こんな園
も、きれいにできると思わ
なんだな。もっとそらひど
いもんやろと思つた。

まだまだ沢山のお話を長時間、ありがとうございました。

ミカン山通い二十五年

石田紀郎



二十五年近く前から始
まつた和歌山・ミカン園通
いである。最初の頃は、京
都を車で出発し、宇治から
奈良市を通過して吉野川
が流れる五條市に至る。こ
こまで来れば川向こうは
和歌山県である。吉野川が
紀ノ川と名前を変えるの
を左岸に見ながら和歌山
市に達し、紀伊水道を右手
に見ながら下津町に到着
すれば省農業園はまもな

くとなる。夏は炎天下の移動を避けて、早朝四時に京都を出たこともある。しかし、この道路は奈良県内で渋滞がひどく、ミカン園までは半日以上の時間がかかるので、その後は、名神高速道路から大阪市内を阪神高速道路で通過して堺市で降りるコースに変更した。それでも半日仕事である。そのうちに、近畿道や阪和高速道路が部分

的に開通したので利用するようになった。一台、三台での和歌山行きであるから、道順の打ち合わせを綿密にやつておかないと互いに見失つたりしたものだから、京都に辿り着く頃には疲れ切つていた。今はといえば、京都南インター→エンジから名神に乗つて、近畿自動車道から阪和高速道を海南まで行き、後は地道をミカン山に登ればよい。途中の休憩を止めれば三時間以内に京大からミカン山に着く。行き帰りは苦ではなくなつた。道路事情も社会事情もすいぶんと変わつたものである。さて、省農業園はこの間にどんな風に変わつたかと言えば、まずミカンの木が大きくなつたことだろう。一日、半日か

けて通っていた頃は、ミカンを見下ろしながら病害虫を探していたが、今では木を見上げるのもしんどくなるほどに樹高は高くなり、枝の広がりも大きくなつて調査がしんどくなつてきた。もちろん収穫量も倍増し、木の加齢とともに味も良くなつてきた。この年月の間に、病害虫や雑草防除のノウハウも蓄積され、大害虫であるヤノネカイガラムシを被害の出ない程度にまで天敵で防除することにも成功した。除草剤もせいぜい年一回の散布で雑草の害を抑えられるようになつた。それだけ、省農業ミカン園としては成熟してきたのであり、仲田さんとしても、我々としてもうれしい限りである。ところが、二十五年の間、ミカンの価格は停滞したままである。とくに農家からの出荷価格はほんのわずか高くなつただけである。こんな状態

であるから、ミカン栽培の老舗である和歌山でも廃園が増加した。我々の省農薬ミカン園の谷向こうにも何枚もの廃園を見ることができる。ミカンの木を伐採して廃園にしたものもあるが、中にはミカンの木を残したもの（放棄園）もある。こんな園では三年もすれば、園全体がクズに覆われて、哀れである。ミカン専業農家は激減した。冬になれば果物はミカンだけの時代から、冬になつてもいろいろな果物が買える時代になり、ミカンの消費量の低下と産地の拡大（生産量の異常なまでの増大）などから、ミカン栽培では農家経営が成り立たなくなつたのである。減反政策が実施され、廃園にすれば補助金が支給されて、全国の栽培面積は相当低下したが、まだまだ過剰生産の状況にある。さらに豊作年になると、ミカンがだぶつき、価格暴落が発生す



石田先生

る。十一月四日に秋の調査を行つた。今年はどの産地も豊作であると聞いていたが、ミカン山に立つて深いため息をつかざるを得なかつた。大豊作である。夏頃から豊作は予想されており、生産調整も進められたいたが、天候に恵まれての大豊作である。生産されたミカン全部を市場に出すとすれば価格の大暴落は必至である。これからは出荷調整が進められる。出荷調整とはどういうことかと言えば、収穫したミカンを山に掘つた穴に捨てるのことなのである。我がミカン山の近くにも、ミカ

ラックでミカンが運ばれて来て、この穴に投げ捨てられるだろう。秋は農村の祭りである。まして、豊作の秋は農民にとってはもつとも笑顔がはじける祭りのはずであるが、今年の秋はさみしい祭りになりそうである。豊作貧乏の秋である。不作に泣き、豊作に泣くのはミカン農家ばかりではない。日本の農業全体がおなじ悲哀の中にある。このままの農業事情を続けて行つてよいのだろうか。また来年はミカン山のあちこちに廃園を見るようになるだろう。高速道路ができ、ミカン山へのアクセスは楽になつたが、ミカン山に行く気分は地道を走つていた頃の方がはるかに華やいでいたようになる。

「椰子の実」の詩の発祥の地は、愛知県の渥美半島の先端、伊良子岬である。はるか彼方の南国より黒潮にのってやつて来た椰子の実。伊良子岬において、その椰子の実との出会いがあつたことからこの詩が生まれた。ここはドライブにはもつてこいの場所で、よく家族で出かけたことを思い出す。

）椰子の実（

紀伊半島の南西部、南紀白浜へ漂着して以来一年半が過ぎ去つた。この地で私は縁があるのはみかんだけではない。椰子の実も



仲：やめようとは思えへんけどねえ。やめようとは思えへんけど。こんな園も、きれいにできると思わなんだな。もつとそらひどいもんやろと思つた。

★ ★ ★

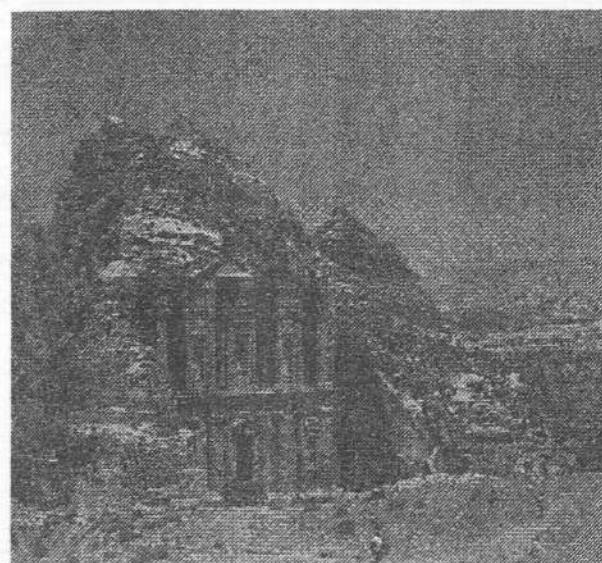
まだまだ沢山のお話を聞きましたのですが、誌面

の都合上、割愛させていた
だきます。お話は、録音し、
テープ起こしも済んでお
りますので、お話全部をお
読みになりたい方は、どう
ぞご遠慮なくご連絡くだ
さい。

南紀白浜より

梅 昭太

アダンの木陰でくつろいでいたりする。



ペトラ遺跡

国際的緊張の原因になりうることも指摘されていま
す。

水不足の原因としては、まず自然条件として国土の約八割が沙漠地帯で年平均降水量が二〇〇mm程度である上に、水源となる湖沼、河川などを持たないこと、農業が淡水の約七割を使用するが生産量が乏しいこと、GNPの伸び率を上回る人口増加(推定人口増加

率三・六%）による都市用水需要の急増や、また不明水が五十四%もあることでも問題になっています。不明水とは水道管からの漏水、水道メータの誤差、また盗水によって供給している水のうち料金が回収できない水のことで、これがひどい地域では八割ということです。街中や沙漠の一角でよく水道管からの漏水を見かけましたが、

開拓者

それに対する苦情がでないなど住民の水不足に対する危機感の薄さの問題もあるようです。もともと水のあるところを求めて移動する遊牧民が第三国に国境線をひかれて「ヨルダン」「人になつているだけ」という意識のゆえとも思われます。



干上がってしまったダメ

問題はかり挙げてしま
いましたが、彼らからは大きなことを教わりました。
それは本当の「豊かさ」とはなにか?ということです。
仕事の時間は短くまた多くがお茶を飲んでおしゃべりをしているだけ
という生活。これでは「発展」はしないかもしません。でも家族、親戚を大切
にし、子どもを大切にし、貧しく困っている仲間は持つていてる者がわかるのが当然のようです。大抵のことが「ムシユ・ムシユ・

・帰国して

ケテ「問題ない」で笑って済んでしまいます（一緒に働く日本人は困っています）。「たが：」。子どものいじめではなく、また犯罪も大変少ないと聞きました。特別な資源はありませんがヨルダンの売りは「治安のよさと人のよさ」でしょう。

くは偏っていて本当の情報は少ないので、ということを感じました。私の帰国はアメリカへのテロの四日後でした。日本は野次馬的に報復攻撃にのつっていました。私がこの夏学んだアラブの人の平和さも相変わらず日本では聞かれず、攻撃的な面ばかりの報道が流れています。

アラブ諸国やパレスチナがくすぶっているいま

に打ち上げられることもよくあるというのに。しかし、このヤドカリは、ここが温泉地であるという条件もあって、運良く冬越しに成功したのであろう。

美大島よりもさらに南からやつてくる。椰子の実は、黒潮に連れられて行く先もあまりわからず、長い旅をする。これは人生にも重ねられる。

つていますか？

ヨルダンを知っていますか

大庭まり子

「ヨルダン」という国がどこのどんな国なのかさうと言える人は少ないと思います。ヨルダン川西岸地区のパレスチナ問題や沙漠の国を思い起すのではないでしようか。JICA（国際協力事業団）のインターーンで二ヶ月ほどヨルダンに行くことが決まつたときは私もそんなイメージをもつていて正直不安でした。

・ 国事情

ヨルダン（Hashemite Kingdom of Jordan）は、面積は約九・八万（そのうちヨルダン川西岸地区〇五五万はイスラエルの

ヨルダンは人口の約九十三%がイスラム教で、最貧国ではありませんが地域的に大きな貧富の格差があります。また、ヨルダンは近隣アラブ諸国と違ったがつて工業分野も乏しく、結局、海外産油国への出稼ぎ者からの送金と、日本、米、独や周辺諸国等からの援助が国財政の支えとなります。穀物をはじめ輸入に頼る経済（主食の小麦の自給率は五%を下回る）からの自立を図るため農業

生産を拡大する必要がある一方で、水資源は量・質ともに深刻な問題となっています。

・水事情
ヨルダンは周辺諸国と比較してもとりわけ深刻な水不足で、水資源の確保を巡る抗争が、中東地域の

もヨルダンの人々は私がいたときと変わらず平穏と聞きます。十月末、この秋初めて一握りほどの雨が降ったそうです。いまごろみんな軒下でシャイ(紅茶)やアッファ(アラビックコーヒー)を飲み、談笑しながら空を眺めている

(おおにわまりこ・農学研究科地域環境科学科水環境工学研究室 修士一年)

率」と「安全性」が農学を支配するなか、百姓達は、「そんなもん」一文にもならん」と言わざるを得なくなっているのです。

しかし本当にそうなのでしょうか。たとえば、田んぼにいて、今まで何の役にもたたないとされたきたユスリカや赤トンボなどの「ただの虫」はなぜ、何のためにそこにあるのかとか言う研究はなされませんでした。彼らは田んぼの生態系に組み込まれており、害虫の発生を左右するものであるはずなのに。さらに、ユスリカは水の浄化に役立つてきませんでした。彼らは百姓が育んできた田んぼが育んできた田んぼの生き物達は本当に意味もなくそこに存在しているのでしょうか。食べ物の価値は、それを支える百姓の仕事が育む豊かな自然、すなわち、空を舞う赤トンボ、虫、水路を泳ぐド

ジヨウやメダカなどを含めて考えられるべきなのです。

【農業を支える

「無意識の世界」

また、田んぼの生き物は百姓の仕事の中で無意識に育まれてきました。たとえば、百姓が田んぼを見に行つて田が干上がるのを防ぐという行為は、実はオタマジャクシを育てています。オタマジャクシが何の役に立っているのかは分かりませんが、オタマジャクシがいなくても農業は成り立つとは言いつれません。実は無意識のうちにオタマジャクシを育てながら農業をすることが多いの虫なら大丈夫」とか「これからウンカがふえるなどということを知るための「技術」とよぶべき物をもっています。この「技術」は百姓が知らず知らずのうちに身につけた物をもつています。この手助けという程度の物でやっと農業は成り立つていいといえるかもしれません。そして、「田んぼを見に行くのはコストを高めるから、その回数は少ない方がいい」と決め付けるのが近代農学なのです。その無意識の世界を

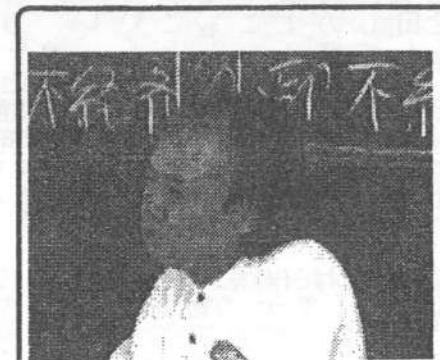
大切にすべきなのです。

また、百姓は「このくらいの虫なら大丈夫」とか「これからウンカがふえるなど」ということを知るための「技術」とよぶべき物をもつています。この「技術」は百姓が知らず知らずのうちに身につけた田んぼの生態系についての知識によって成り立つており、これは無意識の世界の産物です。知らず知らずのうちに育てた生き物の様子によって、田んぼの知識によって成り立つており、これは無意識の世界の産物です。知らず知らずのうちに育てた生き物ジヨウを食べたりするなどという、生き延びるために知恵を人間から奪うことになるのです。いくら農業を

も言い換えれば、食べ物の価値を「食べる価値」でしか見られなかったということです。そこで、「百姓の幸せ」は無視され、奪われていきました。

農作業の最中に飛んでくる赤トンボ、夜の闇のなかいっぱいに飛び回る虫、あぜに咲く美しい花。今の時代、そんな幸せは「力ねにならない」という理由で後回しにされてしまいますが、百姓も、心の中では「まだ膨大にあるのに、今分かっていることだけに頼ってひねり出された「効率よく生産するか」とか、食べものの安全性ばかり考え、その一面的な知識で農業を見てきました。そ

んなことができるのです。今



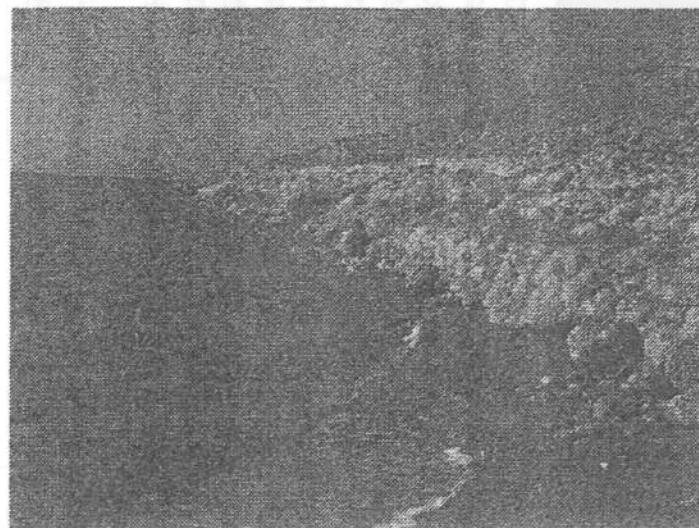
宇根 豊氏

福岡県農業改良普及員を経て、現在「農と自然の研究所」代表理事。水田の減農薬運動を推進し、虫見板を広げる。

の農学の知識はこの「技術」を使って仕事をする際の手助けという程度の物でしかないにも関わらず、その知識だけですべてを片づけようとする農政は、この「技術」を失わせようとしています。その結果、現在の百姓は自分の田んぼにどんな生き物が居るのかさえもわからなくなってしましました。このことは、いざというときには田んぼのド

【「無意識の世界」を引き出すために】

よって、これから農学には百姓の仕事を学ぶ中で、その仕事が無意識のう



死海。湖岸に塩の結晶が見える。

のかなあと想像しています。

(おおにわまりこ・農学研究科地域環境科学科水環境工学研究室 修士一年)

宇根さん講演会開かれる
・・・要旨の紹介

去る十月十三日、農業ゼミは、講演会を開催しました。お招きしたのは、宇根豊氏で、演題は、「経済の国の赤トンボ百姓が考える新しい農学」。宇根さんは、福岡県でおよそ二十年にわたって減農薬運動にかかわってこられました。この運動を通じて宇根さんは、百姓たちとともに、虫見板を使って田んぼの観察を続け、その経験によって農業散布に頼らない技術と知恵を生み出してこられました。今日私たちは、遺伝子組み替え作物の登場、有機農産物認証の制度化、WTO体制下における農産物輸入の増加といった、農作物に関するめまぐるしい状況変化に晒されています。そうしたなかで、「百姓が第一に自分の体を守ろうとしなければ、決して消費者の健康も守れるはずがない。」という宇根さんの言葉は、私たちに多くの示唆を与えてくれます。こうした問題は、農業問題と同様、「生産者の立場」から捉え直すことが必要とされています。

そこで今回は、今の日本農業は百姓の立場からどう見えるのか、さらには百姓による百姓のための「新しい農学」の可能性について、お話しいただきました。ここで、講演の要旨をご報告します。

【「百姓の幸せ」を大切に】

今までの農学は、いかに効率よく生産するかとばかり考え、その一面的な知識で農業を見てきました。それは言い換えれば、食べ物の価値を「食べる価値」でしか見られなかったということです。そこで、「百姓の幸せ」は無視され、奪われていきました。

農作業の最中に飛んでくる赤トンボ、夜の闇のなかいっぱいに飛び回る虫、あぜに咲く美しい花。今の時代、そんな幸せは「力ねにならない」という理由で後回しにされてしまいますが、百姓も、心の中では「まだ膨大にあるのに、今分かっていることだけに頼ってひねり出された「効率よく生産するか」とか、食べものの安全性ばかり考え、その一面的な知識で農業を見てきました。それは言い換えれば、食べ物の価値を「食べる価値」でしか見られなかったということです。そこで、「百姓の幸せ」は無視され、奪われていきました。

農作業の最中に飛んでくる赤トンボ、夜の闇のなかいっぱいに飛び回る虫、あぜに咲く美しい花。今の時代、そんな幸せは「力ねにならない」という理由で後回しにされてしまいますが、百姓も、心の中では「まだ膨大にあるのに、今分かっていることだけに頼ってひねり出された「効率よく生産するか」とか、食べものの安全性ばかり考え、その一面的な知識で農業を見てきました。それは言い換えれば、食べ物の価値を「食べる価値」でしか見られなかったということです。そこで、「百姓の幸せ」は無視され、奪われていきました。

僕が農薬ゼミに入つたきっかけは本当に偶然だった。『出席だけで単位』という言葉に誘われて受講する事にしたポケットゼミ。そこで偶然、自分の生まれ育った南部川村に明日講演をしに行くといふ石田先生に出会つた。お話をの中で、石田先生にゼミの内容を教えていただきと、これまた偶然、地元和歌山のミカンに関する活動をしているというではないか。今まで和歌山県に

そういうわけで興味を惹かれゼミに参加させていたたく事となつた。ゼミに入つてまず驚いたのが、学部生だけでなく院生、果ては社会人の方もゼミに参加している事だつた。幅広い年齢層の方が参加している事で勉強になることが多々あつた。ゼミの普

編集後記

省農薬ミカンを買って頂きありがとうございました。私はミカン園から車で三十分余りの和歌山市出身で、実家でも少しだけですが、今もミカンを作っています。十年前ほど前までは私の家でも出荷するミカンを作っていましたが、車の入れない山の奥の方に園があったことやミカン価格の下落、農水省からの減反の勧めなどがあり、自分の家や親類で食べる以外のミカンを切りました。このようなミカン作りの厳しい現状を知ってゼミに入って来たのですから、皆様にこれほどまで省農薬ミカンが支持され買って頂けることに驚きつつも、皆様のような消費者の支えがあれば、和歌山のミカン作りにも光が見えてくるような気がして嬉しく思っています。

これからも、仲田さんの作る省農薬ミカンと、私たち農薬ゼミとお付き合いいただけますと幸いです。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。(西原)

農業セミ新人レポート

田中智弘



園芸は経済的になりたたくなるでしよう。そのような政策提案の具体策が、これから課題となつています。

★★★
講演会の様子は、録画されて、テープに保存されて

来聴者の方々は熱心にお話をお聞きになり、質疑応答も活発に行われました。予定の時刻をオーバーする程でした。

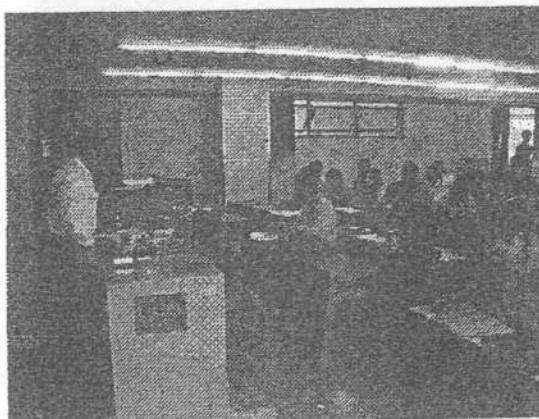
テーマについて議論し、発表し、議論する事でいろいろな角度からの視点を学ぶ事ができた。また今年は宇根豊氏の講演会もゼミの活動として行われた。そこでも企画の立て方、宣伝の仕方、講演の運営など学ぶ事は大変多かった。メインの活動であるミカン園の調査では、何も分からぬ自分に

基本から懇切丁寧に教えてくださった。正直、和歌山出身の自分が他県出身の方にミカンについて教えてもらうのは少し奇妙な気分だった。それだけ普段目にしているものでさえもまだまだ知らない事がたくさんあるという事だろう。これからもゼミに参加する事で学ぶ事は多いと思う。

2001年12月8日

ちに育んでいる物を見出し、その後に、たとえば「赤トンボはなぜ人間にとつて必要なのか」とか「なぜ百姓仕事が赤トンボを生み出すのか」といったことを追求する中で、その物の価値を研究していくといふ姿勢が必要なのです。百姓仕事をするなかで見えてくるものです。だから、百姓仕事を学ぶことが

はトラクターよりも耕運機で、耕運機よりも手と足でなされるべきです。その方が、田んぼで何が起きているのかということが皮膚を伝わって分かるのであります。



講演風景

「場作り」と経済 改革の必

「」と経済 改革の必要性】

農薬ゼミのご紹介

私達農薬ゼミは、一九六七年和歌山のミカン園にて起きた農薬中毒事件をきっかけに、「農薬は減らせる」を合い言葉に、学習活動を行っていますが、それを行うことを目的とした活動です。「田んぼの学校運動」という、百姓仕事を体験することを目的とした活動を行っていますが、それ

徴は、単に「農薬は減らせる」と主張するだけではなく、和歌山のミカン園をフィールドとして、実際に農薬を省いたら農業はどうなるか、農薬を減らして栽培したミカン園では害虫や病気がどのようになるかを、栽培にかかわりながら、実践的に調査研究を続けてきました。

百姓仕事をする中で、「なんで田んぼには石ころがないの?」「休耕田のところは走りにくいね」ということに気づき、百姓仕事の目に見えない偉大さや恩恵を学んでもらおうという物です。このような運動を、百姓からも主体的に作っていくことが大切です。

また、そのような場作りを可能にするためにも、「カネにならない」とされてきたものを補助金制度などを使つて経済の仕組

た。その調査のための基本となる農業や環境に関する知識や理論を勉強するゼミを毎週金曜日に開催しています。興味を持って下さった方は、お気軽に最終面に記載の問い合わせ先にご連絡の上、是非一度足をお運び下さい。

～みかんを長持ちさせるために～

箱の中のみかんをいちど新聞紙の上で転がして、余分な水分を飛ばし、よく乾いたら箱の中に戻して、風通しのよいところで保管して下さい。また傷んだミカンがありましたら、見つけ次第すぐ取り除いて下さい。こうして頂くと痛みにくくなり、条件がよければ数週間保存できます。

今年もみかんをお買いあげいただき ありがとうございました。

おいしい省農薬みかんをお届けします。

このみかんは、食べる人と作る人の安全を念頭に置き、農薬ができるだけ使わずに栽培されています。市販のみかんと比べて器量はよくありませんが、懐かしい自然の甘みと酸味を味わうことができます。

どうぞ、ひとつひとつ味わってお召し上がり下さい。

みかんや農薬ゼミに対するご意見、ご批判、ご要望などがございましたら、どんどんお寄せ下さい。皆さまからのお声を励みにして、これからも活動をしていきたいと思っております。

農薬ゼミニュースレター第13号

2001年12月8日 京大農薬ゼミ発行

〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

生態環境論講座 石田紀郎 気付

Tel : 075-753-7832

Fax : 075-753-7834

E-mail : kgrap@kais.kyoto-u.ac.jp